

昭和二十年 一月 関東州熊岳城第二十二練成飛行隊に転属。後、流行性脳脊

髄膜炎で陸軍病院に入院。家族には「ギトク」の入電。陸軍一式戦(隼)での特攻訓練中、格納庫に突入する惨事が起きる。

同年 六月 部隊は北満州に移動。

同年 八月 教育隊に派遣中、ソ連軍の進攻。原隊に戻る途中、新京(長春)で邦人の避難列車に遭遇。その後四平街で終戦を聞く。

(北海道 五十嵐 甚吉)

青春無残の追憶

岩手県 千葉 義一

一、シベリア送り

少民屯收容所で帰国を待つ束の間は兵士達の平和な保養の日々でもあった。戦友同士出身地の住所を交換し、早く帰った者が戦友宅に生存の連絡をとることなど交遊を深めたり、家郷の子供自慢を語る召集兵。満州に残した家族を思いやる在満補充兵など、心は早や家郷に帰る手筈を整えている。

隣町千厩町出身の一中隊の幹部候補生仲間の菊地四郎が收容所内で偶然にも、二月に一緒に入隊した歩兵連隊の実兄満男とばったり会って、互いに元気でいることを喜び合っていた。後にシベリアでは兄弟別の收容所に分かれ、昭和二十一年(一九四六)年一月十日、同じ日に兄弟共に病死する悲運に見舞われている。

十月末頃から連隊ごとに千五百人単位にチチハル駅から帰国に向かい(と信じていた)出発していた。不思議にここで大方の将校は分離されて、

将校だけの一団に編成され、旧軍隊組織の解体の前兆となった。我が搜索連隊を主力とする第十四大隊は、他の連隊の兵士、六月根こそぎ動員された年輩の召集兵、開拓団員、軍属、在満邦人の混成大隊であった。

幹部として大隊長は初めての顔、加藤千代之助少佐(岐阜県出身)で、副官は我が連隊副官であった西宮直吉大尉(秋田県出身)で、以下将校十五、六人。搜索連隊から島津中尉、渋谷軍医中尉、豊倉少尉等が含まれ、進藤義彦連隊長はじめ他の将校、見習士官は将校団に編入され別行動となった。

十一月四日、快晴で暖かい日であった。第十四大隊千五百人は足取りも軽く、隣の楡樹屯駅に引率された。待っていた列車は牛馬を積む有蓋貨車の二段仕切りに下段に少々の乾草が敷かれ、一両

に六十人ほど詰め込まれる狭くて暗く、寒い密室で上部に鉄格子の小さな明かり窓のある隙間から風の吹き込む粗末な貨車であった。

不思議なことに内地に帰るには不用と思われる牛や穀物、被服類などを積んだ貨物も後ろに連結された。外から重い扉が閉められ、車両の所々に警戒兵の厳重な監視がなされた。まず用便に困り床に穴を開け、周囲に毛布を巻いて利用する、食事は停車時に炊事車から木樽におかゆを貰う。

チチハルから南満方面に向かうはずの列車は北西を指して走り、やがて国境の町満州里に着き長時間停車した。ここではさらに逃亡に目を光らせ、警戒兵が右往左往している。ソ連側から通訳を通して、満州は戦災で不通箇所が多いため、チタ経由でシベリア鉄道でウラジオから乗船、帰国との通達があった。駅周辺は既に雪景色で、駅舎の屋根から一メートルもの太いつらが垂れていた。

いよいよ国境を越えシベリア入りとなる。これからの我々の運命は誰が知ろうか? 「ソビエトは

労働者、農民を大事にする国だ、無名戦士の我々は必ずウラジオから帰国できるのだ！」「いや、シベリアは開発に労働力が不足している。捕虜は戦利品と同じだ。死ぬまで奴隷労働さ。もちろん内地でもアメリカ兵により男は去勢、女は彼等の慰みものに決まっているよ！」何を信じてよいものやら、頭は混乱するばかり。

国境を越えた列車は雪原を走りチタ駅に着いたらしい。高窓から見える異国の様子は丸太積みの小さな古い住宅。貧しげな着ぶくれの人たちがゆったりと往来する姿が目に入る。

しばらく停車した列車はやがて西を指して進む気配で、悪い予想が当たったようだ。闇の中に無言の眼が光る。ソ連警戒兵の甲高い声が、貨車の隙間から飛び込んでくる。

これがシベリア鉄道なのか。かつてアジアからヨーロッパへの旅には航空路が発達しておらず、専らシベリア鉄道が利用された。延々続く二条の鐵路は、東端ウラジオからウラル山脈まで七千四

い起こしてみたものの、現実甘いセンチメンタルに浸れることではなく、ゴトンゴトンと揺れ動く真つ暗い貨車の中で、厳しかろう今後の運命を占う夜を迎えていた。

十一月八日頃の朝、チタより二、三西に入った小さな無人駅に列車がごとりと止まる。カダラ村のチェルノフスカヤと呼ばれる田舎の炭鉱部落と
いうことであつた。

初めて踏んだ異国の地は既に寒冷地。軍靴の下に感じる大地は凍てついてコチンコチンと乾いた音。垢あかに滲んだ軍服を通す初冬の風の寒さに、思わず身震いする。快晴なのに空は鉛色に見え、はるか地平のあなたは暗くかすんでいた。ここで初めて彼等の言う「トウキョウダモイ」(帰国)は脱走を防ぐ手段でたばかり、抑留労働させる目的で連行したことを知った。

「ダワイダワイ」とせきたてる警戒兵(コンボイ)達も捕虜扱いの態度に変わり、荒野を大步いた小高い斜面の丘に出た。そこには捕虜収容

百キロの道のりを経て、さらにモスクワを通り西ヨーロッパに至る総延長一万キロを超え、二十日前後もかかる唯一の交通路であることを思い起こした。

少年期に小説やヨーロッパ紀行本を読んだ中に、果てしない大陸横断鉄道は旅人をエキゾチックの虜とりこにした風景が描かれていた。広漠たる荒野の沿線には、旅の疲れを癒すかのように湿原のお花畑が続ぎ、あるいは白樺林を通り、時に暗い大森林をかくくぐると思えば、そこに静かな湖に出会ったり、一大パノラマが展開された。

名もない小さな駅に長い時間停車すると、乗り合わせの世界の旅芸人が、歌や踊り、サーカスをホームを舞台に披露してくれ、乗客からヤンヤの喝采を浴びる。沿線の農民達のにわか売店が設けられ、野菜、ピロシキ、ギョウザなどを商うという風情であつたという。しかし冬の鉄道は日が短く暗い雪に覆われ、時には雪煙や吹雪に視界を遮られ、無聊むげうで淋しい長旅であつたとか。等々思

所として最近急造中の半地下兵舎(ゼムリヤンカ)があつた。完成八棟ほどで造りかけの棟もあり、その夜は狭い兵舎に折り重なるように眠つた。

翌日から全員で兵舎造りが始まつた。土木機械はなく、工具も少ないので大変であつた。兵舎の内部は真中を通路に、両側に一段の荒板張りの床。南面の地上の部分に明かり窓をつけ、東西の出入口には地上に出られる階段の土間二カ所に板扉。室内両入口近くにペーチカがあつて石炭を焚く。電灯はしばらくの間無かつたので、夜は全くの暗闇、明かりは各棟ごとに工夫がこらされた。

兵舎完成と共に外周に三重のバラ線も張り、バラ線内部は鍬で土を柔らかく耕し、逃亡者があれば足跡が分かるように、念の入つたものである。バラ線柵の四隅には望楼が建てられ、昼夜交替で警戒兵が見張り、柵に近づくと大声で怒鳴り、時には威嚇射撃を受けることもなつた。

チェルノフスカヤの回想
収容所(ラーゲルとよばれる)中心部の一棟に

「第十四大隊本部」の看板がかかり、将校と經理部、若干の当番兵をおき、以後「第十四作業大隊」と呼ばれ、一棟六十人ぐらいつの中隊編成とされ、大隊長のK少佐、副官は我が連隊出身の西宮大尉、渋谷軍医など十五人ほどの将校がいた。

兵舎が出来次第、いよいよ大方の者はカダラ村地内のトルム、ノービートルム、マリウトカなどの炭鉱で三交替で石炭を掘り、やがて多数の死者を出すことになる。

住まいの地下兵舎は作業から疲れ帰ってきても休憩室も食堂もなかった。戦友二人組んで荒板の床に毛布一枚を敷いた上の、約五十センチ幅が自分の領域のすべて、食事の配分も食事も休養の場、寝る所もこの範囲から出ることはなかった。

一番関心のある食料は、しばらくは満州から持ち込んだ米の重湯に近いかゆと馬鈴薯少々の塩汁。米が無くなると酸っぱい黒パン、朝に昼食分まで出るが、一回に食べてしまい昼飯抜きが多く、夕食はパンと牛の内臓の塩漬け少々のスープ一杯。

楽しみとする夕食の分配は厳しく、真剣であった。六、七人の各分隊ごとに当番がパンを切って、即席の天秤ばかりで平等に分け、塩汁スープも等量に分け、中味の塩漬けの内臓は小刀で等分し、さらに抽せんで分配された。

湯水の支給はなく、各々飯盒に雪をつめ、ペーチカで融かして飲むのだが、目を放すと盗まれることが多いので、生ぬるうちに飲むため下痢患者が出始めた。

食料不足から腹の減るのにはまいった。朝昼二食分のパンを一度に食べても満腹感がない。作業の帰りに口に入る何かを探して歩き、列から離れて警戒兵に怒鳴られる。道端に食える雑草のアカザなどを見つけると先を争いつかむ風景があり、そこには階級、年齢の相違がなかった。パン工場前を通ると香ばしい匂いにたまらず、庭端に掘られた穴に群がる放し飼いの牛や犬を追い出し、パン屑をあさる者もいる。

栄養の不足と重労働、衣服はボロボロで不充分

黒パンは一日三五〇グラムと決められているのに、量は毎日まちまち。

夜の食事は日増しに米不足のため、蕎麦のオートミール、無精白（馬糧用）のコーリヤンや原穀の粟、グリーンピースなどのかゆ、塩気なしの日も再々。青野菜など見ることもなく、馬鈴薯やキャベツの塩漬けをスープに少々、日本人の食事に程遠く、炭鉱労働に耐えるカロリーは望むべくもない。国際的な捕虜給与の規定に決められている野菜、肉、バター、砂糖、タバコなど見たこともなく、給料もノルマを達成しないとの理由から一円も貰えなかった。

冬の日暮れは早く、夕食を兵舎ごとに当番が棒で担いで炊事場から運ぶ途中、入口地下道の暗がりです手に手をつたみ盗み食いして騒がれたり、隣の兵舎の当番になりすまして毛布に包んだパンを背負い、途中ズラかって持ち逃げして空き兵舎にもぐり、腹を満たしているのを発見され、袋だたきに遭う者などの悲喜劇もみられた。

なのに、零下三〇度を超す酷寒など、日本人達は何もみる瘦せこけ生気を失っていく。下痢症状の原因の一つのできごとは、零下一〇度ぐらいの十一月の夕暮れに野菜支給に大勢で麻袋を持って、一キロほど先の農場に出かける。雪に覆われた野積みのカブ大根をスコップで掘り起こし、炊事場に持ち帰るわけだが、凍ったカブを歩きながら舌で融かしアイスをなめるように食い始めると、なんと甘くてうまい。外套のポケットにも詰め込んで兵舎に帰り、ペーチカで融かして食い放題となったが、これがいけない。翌日から下痢患者が増え、血便垂れ流しが出始めたことにより、一棟を患者病棟として重症者を収容する。

シラミ、南京虫の攻撃で安眠もできない上にこれらの媒介で発疹チフス、栄養失調のダブルパンチ。二十年十二月から翌年春まで病棟から毎日のように死亡者が出て、荒板の棺に納められ、カダラ地区の日本人墓地に運ばれ埋葬される。

夕方作業から帰ると今日は何兵舎の〇〇が死ん

だ。軍属の××が死んだ」…との情報が流れるたび、明日は我が身かな？というところ。これほどの病人、死人が出るほど全体が弱っているのに、ソ連側の仮借のない労働は一向に緩める様子はなく、保養の休暇などを与えることは一日とてなかった。

私の仕事は最初、第六兵舎の指揮班の連絡係として本部との連絡、本部指示の伝達、雑作業に従事し、幸い炭鉱で働くことはなかった。

酷寒の冬を越し翌春から営内雑役、大隊本部勤務。患者となり入室後炊事、医務室勤務。健康回復後は農場作業、雑作業。やがて新聞班に選出され、営内の壁新聞編集を担当し、後に他の収容所を転々流浪する。

衰弱死の危機から脱出

二十一年二月、本部勤務と島津、大竹両中尉の当番を兼ねていた自分にも、運命の厄病にとりつかれる時がきた。我慢していた下痢が悪質の血便に変わり、物凄い腹痛に襲われ、渋谷軍医の診断

つたなし、失禁する生温かい血便は、肌着との間を百足がはうような感触で流れ靴底に溜まる。

替わりの肌着はない、どうしようと思ったとき、後から「千葉よ。洗濯してやるから脱いでこれを履けよ？」天の声か：振り向くと満州時代の古兵殿であった小峯兵長の顔があった。彼はこの病棟の勤務であつたらしい。

食事は所属兵舎より玄米の重湯らしいものが届けられるが、皆ガツガツ食つては便所通いを続け、かえって胃腸を苦しめているように思えた。もちろんこれほどの重態患者なのに、医者のお診、治療、投薬もない。衛生兵が検温する程度で、自分の病名すら知らされず、ただ死を待つばかりの病棟である。

入室以来、目に見えて痩せこけてきた。自分で二の腕を握ると親指と中指でまわる。腿をつかむと両手の親指と中指で回った。これは大変、ここで死んではいられない。ようし、食って死ぬか食わずに生きるか、賭けをして断食してみよう。こ

の結果、患者病棟に移された。

病舎は百人ほどで満員。発疹チフスの高熱にうなされて、うわ言に妻子や母親を呼んでいる患者。腹痛を訴え苦しむ者。下痢患者の用便の音とむせ返る悪臭。栄養不足から結核が昂じ、咯血する青白い顔の男。戦友に看取られ、今正に昇天しようとする栄養失調者。虚ろな目を天井に向け、伸び放題の髭の下に萎えしなびた肌、痩せ細って小さく老化した肉体は、一年前、勇躍満州に渡った秀麗な眉目輝く二十歳の青春の末路なのであろうかなぜ天はこれほど残酷に我らを処遇するのであろうか。死を看取る戦友もはや涙も枯れていた…。

こちらも病棟に落ち着くが早いか便所通いが始まった。病室の東西両入口二カ所に、患者用の木樽に踏み板を乗せただけの便槽が露出のまま置かれていた。凄い腹痛と一緒に便意が襲ってくる。

便槽をまたぐ、胃の中は空なはずなのに、コハク色の血便は多い。熱も出てきた。寝床に入つてまたすぐ便槽に走る。行列で満員だが我慢するに待

れこそ命賭けだ：食事は隣の人にやって、食事の時間には毛布を被り我慢することにした。

断食二日目には熱もあり足がふらつき、便槽まで床板づたいに歩くほど衰弱したようだ。

その頃、左隣に白髪混じりの人が毛布をかぶり、うんうん呻きどおし、ひどい臭いの血便がこちらに流れ込んでくる。朝になって静かになったので、毛布を揚げて覗くと、呼吸がなく死を迎えていた。この人は浜松出身の五十歳前後の高等官軍属だという。やがて仲間の軍属連中が通路に集まり、娘婿という若い人がきて、おいおいと泣きだした。こちらも心細くなり、滅入ってしまう。

さてまたその翌朝、反対右側に浅黒い屈強そうに見える、うんとともすんともなく眠ってばかりいた男が死んでいる。いよいよ三日目は、俺の番かなあ：と、死と対決することになった。

明けて翌日、ぼかりと眼が醒めた。「おお、俺は生きているぞ」奇跡というべきか、悪性の下痢は止まり、熱も大分下がったらしい。おかゆを食

べてみると、下腹に力が出て爽快になった。今まで何度か死線を超えた。「俺は不死身なのだ、絶対生きて帰るぞ!!」：そんな叫びが胸に込み上げてきた。

抑留中にはこの病気のほか、いろいろの危機があった。栄養失調になって頬がこけ、肋骨はあらわに浮いて胸肉がへこみ、正に骸骨を見るような姿にもなった。

酷寒期の作業現場から帰る夕方、ホロ付きトラツクの疾走中ついに凍傷になったことがあった。左手の薬指と鼻の頭が白蟻状になり感覚がない。あわてて両手で擦り合わせたが、やがて双方とも水泡となり爪が剥がれたが、幸いにも皮膚が再生して回復した。

ある兵隊は凍傷で両手の全指の第二関節から先がただれ、腐肉が削げ落ち指先の骨だけが残り、作業用具も使えないので、彼の現場ではノルマを仲間みんなで背負うということもあった。

また靴下や防寒シャツの綻びの穴からの寒気で

初代大隊長は兵卒上がりの四十代後半の初対面のK少佐で謹厳実直、物事のけじめをはっきりするタイプ。入ソ後しばらくの間兵隊に階級章を着けさせ、夜の兵舎内では日本軍式呼をとおり、軍人勅諭五ヶ条の斉唱もあったが、後でソ連側の知るところとなり、あわててこれを中止するという徹底ぶり。

K少佐は処遇改善とノルマの緩和についてかなりきつくソ連側と交渉を重ねたというが、ソ連側の印象は悪く、作業成績（ノルマ）の挙がらない理由はK少佐の策謀で、天皇制護持で反ソ指導者と目され、ついに二十一年四月「宮城遥拝事件」が起きたものと思われる。

ラーゲル内で出会った異色の人、忘れ難い人物を回想する。

言葉の分からない抑留者たちにとり、こちらの考えを相手に伝えるには通訳に頼るしかない。通訳の訳す言葉で相手の心証をよくもし、悪くもする。通訳の人柄が鍵を握ることもある。

凍傷にかかる者も見ているので、充分注意して補修するが、古軍足をほどこいて縫い糸に用い、針は鋼鉄線拾って来て先を石で磨ぎ、頭は石でたたいて穴をあけ利用した。

ある時は左股から足先まで赤く腫れ上がり、痛くて歩行もできなくなった。ソ連軍医に診てもらうと、この地方の風土病の「クインケ浮腫」という病気で、藪蚊が媒介するものということでした。しばらく休業したこともあった。幸い何度も死線を超えて生き耐えたものである。

ラーゲル内の人物像

チエルノフスカヤ収容の千五百人の主力は百七師団。ほかに他の師団の兵隊、軍属、開拓団員、地方人（民間人）など、まさに多士済済というところ。四十歳を過ぎた老将校もいれば初老の軍属、十七、八歳の義勇軍の少年、在満の会社社長、料理屋の親父、シベリア出兵で駐屯経験の老巡查、あるいは背中から腕まで入れ墨したヤクザくずれで密かに花札、麻雀牌を持ち込んだ男もいた。

入ソ当時の通訳は、満州で現地入隊したという夏目さん。痩せて小柄、もの静かな人で、ソ連将校ががみがみ声高に文句を言っても、彼は小声で簡単に通訳するので、しまいにはソ連将校も怒るのを諦めるといふふうであった。

夏目氏のあとに、名前を忘れたが白系ロシア婦人で、彼女については後に書くので割愛する。そのあとに長谷川通訳がいた。物静かで一見ヌーボーと映る人物。五年間抑留の後、抑留体験を素材に代表作「シベリア物語」で文壇にデビューして「長谷川四郎全集」その他の著作を残し、六十三年、七十七歳で没している。

異色の少年に正吉君がいる。中国から満州に移動し終戦を迎えた山陽方面出身の一団がおり、十七歳ぐらいの少年がいた。

中国戦線でS大尉指揮の日本軍がある部落の討伐中、逃げ遅れた鄭少年が兵隊達に可愛がられ、「正吉」の名前を頂戴し、いつからかS隊長の当番兼通訳となって北満までついてきたらしい。

やがて終戦。中国へ帰るよう説得したが、身寄りもないので日本に連れて行って…と哀願され、日本人と偽り入ソしたものだといふ。

鄭君は兵隊達の影響で広島訛りの流暢な日本語であった。同年輩の義勇軍の少年達と作業を共にしていたが、やがてソ連側では素性を知ったらしく、いつからか姿を消している。無事故郷の中国に帰り、幸福な人生を送ることを祈るものである。

女性通訳と子供たち

二十一年春頃から三十代後半の碧眼金髪の女性美人通訳が現れた。名前は忘れたが、彼女はハルピンに住む白系ロシア人。夫は日本人で、終戦当時将校として中国大陸に従軍中であつたという。

その頃、炊事勤務をめぐりラーゲル内のトラブルがあつて、過半数の勤務者が炭鉱作業に回され、代わりに各兵舎から選ばれた数人が炊事場勤務となる。その一人が私で、お陰で米の昶摺りや、量を増やす雑穀の炊き方など勉強させられた。

日中は大方の兵隊は炭鉱に入っているのです、昼

んだもの」「ああそうか、タケシの内地はあのハルピンだものなあ。忘れられないはずだよなあ」兵隊達の脳裏にも華やかに思えたハルピンが蘇り、みんなしんみりするのだつた。

彼女の通訳も春の季節で終わり、後任に復員後翻訳家、作家として有名な長谷川四郎氏が専任することになった。女性通訳はその後どんな運命をたどり、タケシ、ユリコはどんな人生を送り、瞼の父に会えているだろうか、彼女たち親子の姿がふとよぎるときがある。

便所通いと入浴風景

入ソ当時の便所は北側奥の高所に簡単な長い溝を掘り、風雪にも野天に一列に並び利用していた。人数が多いのですぐ満杯、翌春には悪臭と蠅の発生などの伝染病を恐れてか、収容所の一番低い南東の望楼下のバラ線の角に沿ってブラック木造の大型便所が作られた。

つまり間口五メートル、奥行十メートル、深さ三メートルぐらいの板囲いにトタン屋根だが、内

頃の炊事場は閑散となり、女性通訳が二人の子供を連れて炊事場に寄つてくれる。一緒にお昼食べてと言うと、普段遠慮がちな女性なので「頂いてよろしいですか？」と二人の子供も日本語が通じ、兵隊達が可愛がるので、喜んで食べるように食べている。母親はロシア人から「ヤボン、ヤボン」とからかわれるので、日本人の多いここに足が向くようだといい、また「将来タケシを日本に留学させ、父を捜して親子水入らずに暮らしたい」とも洩らしていた。

昼飯のあと日溜まりに出て子供達と遊んでやる一時もある。兵隊の中にはこの子達と同じ年頃の家郷に残した子を思い出し、抱きしめて放そうともしない一齣も見受けられた。

兵隊たちが「あーあ、早く内地に帰りたいなあ」と愚痴ると、タケシが「あー僕も内地に帰りたいなあ」とくる。「タケシの内地はどこなの、なぜ帰りたいの」と聞く。「だって内地に行くといふご飯や白いパン、ピーナツがいっぱい食べられる

部の間仕切りは一切なく、床面には部厚い板を三十センチ間隔に平行に並べただけ。何十人も用が足せ、好きな場所好きな方角に向いてしゃがむのでみんな丸見えだが、男同士は恥も外聞もない。知っている同士は互いに向き合つて雑談を交わし使用する。

夏はトタン屋根で焼けるような暑さ、冬はまた夜中には零下四〇度にも下がるので、糞尿が三メートルの底に届くまでに凍りついて、まるで洞穴の鍾乳石筋のように盛り上がってきて、やがて踏板を超えて尻に届く高さになる。横着な者は凍った便にのつて、踏板の上に用を足す者もいる。

この頃には軽病者が便槽に入り、鉄棒で便柱を砕き落とし、板モッコで野外へ運び捨てる。

みんな体力が弱っている上に、兵舎から百五十メートルぐらい距離のある所もあるので、体がすつかり冷えきって、腹具合の悪い者は夜中に何回も便所通いし睡眠不足になったり、途中一休みしない用が足せない者。痔の悪い者は異常な寒さ

のため肛門から血が吹き出し、顔を歪め苦しむものの、手入れする紙も布もあるはずがない。

ソ連の兵士達も気軽に利用し、日本人に話しかける。普段怖い顔の彼等も、ここでは人のよいロシア人に変わるから不思議だ。

着の身着のままの生活で、垢に汚れた肌にシラミ、南京虫に攻められる発疹チフス、大腸炎、栄養失調に倒れる者が増える中で、月日の経過と共に改善がなされ、薄暗い電灯もつき、湯沸場が設けられ湯茶も出されたが、浴場だけはついに設けられず、冬の間二回ほど、一キロほど先の街外れの公衆浴場に通ったものである。

さて入浴場は、まず二坪ほどのコンクリート室の天井の鉤に装着物のすべてを吊るし、石炭で加熱し、入浴後までの間に熱消毒による滅菌とシラミ退治する仕組みであるが、原始的消毒法の不完全さから窯の割れ目から漏れた火によって全部焼失したグループもあったという。

浴室入口で小型マツチ箱大の粗悪な石鹸と綿布

緒のロシア人たちは一様に白樺の葉のついた枝を束ねた箒状のもので、裸の体をたたく風習を知った。彼等はまた赤毛の恥毛をかき分け、毛ジラミを夢中でつまむのどかな風景もみられた。

逃亡と射殺事件

チエルノフスカヤ第十四作業大隊、つまり我が収容所は全くの労働力の大隊であつてか、共產主義理論の学習の強要とか、オルグによる教育活動はそう烈しいものではなく、軍隊組織の解体とか、いわゆる民主化運動の初歩的段階のものであつた。最も力の入るのは、炭鉱を中心とするノルマの消化と、逃亡の監視に向けられていたと思う。

朝晩の食事前の人員点呼の厳しさは常識を超えるもので、収容所入口正面広場に各中隊（兵舎）ごとに五列縦隊に整列。ソ連収容所長に敬礼し、彼等の点呼を受ける。

我が経理部には幸い一丁のソロバンがあつて、日本側本部将校が、各中隊ごとの番号により人員を計算し、病棟、炊事場勤務者数の報告を受け、

が渡され、五十畳ほどの広さのコンクリートの床。シャワーの設備はなく、周囲に突き出ている蛇口から生温かい湯をくみ、長椅子に腰かける。スチームは故障で寒いのが、湯桶二、三杯で垢を流すのだが、厚くこげ着いた垢は真黒い縊よになつてはがれてゆく。

切れ味の悪い西洋カミソリが渡され、自分で陰毛を剃らされる。ロシア人には毛ジラミが多いことからの習慣であるうか、風通しがよくなり、腰が寒々しく感じる。

外には次の集団が待っているので早々に帰るので、夜更けの寒空にすっかり湯冷めして喜ばれないし、全員一斉でないのでシラミ退治に万全でなく、次第に敬遠されるようになった。

後に移動したガルホンでは、小浴場ながらロシア人と一緒に、浴室の外に幼稚な薪を焚く窯の上に真赤に焼けた石がのつており、桶で水をかけ、室内は湯煙りと高温の蒸し風呂となつて、周りに板敷きの階段に寝転び汗を流す原始的なもの。一

五分間でピシャリと合致して報告するが、余りの早さに彼等は信用しない。

警戒兵が手分けして各隊伍を大きい声で「アジン、ドウワー、トゥライ、チュテライ、ピーーチ」と数えて紙に書き、他の兵が各兵舎、炊事場など全部回つてチェックし、これを持ち寄つて合計する。これが感心にも一回で合うことはまずない。時に計算に弱い兵隊がいると、また最初から「アジン、ドウワー……」とやり直す。掛け算に自信のない兵隊は、五人、十人、十五人と隊伍を数えるのがある。日本人将校団も呆れてて結果待ち。所要時間が何と早くも二十分、大抵は三十分から四十分。冬は零下三〇度にも下る寒さの中に震えながらの点呼は、骨身に沁みるいやな行事で、凍傷にならないよう足踏みし、手の甲と頬をこすりながら忍耐するより方法はない。

二十一年春まだ浅いある朝、夜明けと共に警戒兵のただならぬわめき声があつて、各兵舎の不寝番が叫ぶ。「起床、起床。非常点呼？」の声に叩き

起こされた。集合すると広場には、殺気立った警戒兵が右往左往し、腰の拳銃に手をかけている者、いきり立つ軍用犬に引きずられ必死に綱を握っている者もあった。

四隅の望楼には軽機関銃が置かれ、物々しい情景であった。仲間のひそひそ話で知ったことは、昨夜逃亡者が一人あって、身代わりに某曹長が射殺される事件があったらしい。

全員整列の上、いつもより厳しい点呼があつて、険しい顔の所長が、昨夜炭鉱で逃亡兵があつて、逃亡を助けた下士官が現行犯で現場で射殺された。君達は我が国の領外に逃げ終える企ては全く無謀であり、自殺行為である。二度と逃亡があれば、責任は大隊長に及ぶであろうし、諸君への監視、処遇も一段と厳しくなろう云々：長々の説教の上「脱走者は既に捕まっている。また犯罪を幫助した者の死体は門の入口に置くので、よく見て注意するがよい」

営門のバラ線脇にはあわれにも部下を庇い死を凍る雪原の北国にも四月を迎えると、静かに春が訪れる。收容所の回りの丘陵も黒い土が見えた

と思えば緑の草が芽ばえ、満州では「迎春花」（インチュウホア）と呼んだ気の早い翁草がビロードの花弁をもたげてくる。

四月も末になるとロシア人はうかれ気味になる理由は、すぐ目の前にメーデーがくるからだ。働く者の祭典メーデー（五月一日）は、ロシア人が氷の中で指を折って待つこの日であり、この日から春爛漫の自然の饗宴が始まるのである。街は赤旗と仮装の列が続く明るい日差しに、厚い冬の装いから春着に替わる節目にもなる日だ。

こんな折にも、我が收容所に降つてわいた事件が突然発生した。

その日はメーデーを二日後に控えた二十一年四月二十九日のことであつた。收容所内の捕虜たちもソ連で初めてのメーデー体験で、一日労働から解放されるであろうとか、特別献立の食事が出るそうとか、甘い期待感に包まれる雰囲気浸っていた。また東シベリア地区のソ連軍の偉い政治局員が視察に来るということで、外の仕事は休み

招いた曹長が、寝棺に冷たくなっていた。惨劇のままの姿であろうか、防寒帽で顔は見えないが、外套の胸には血糊がべっとりとき、生々しい事件を物語っていた。

やがて夜中に荒野をうろつき、捕まった逃亡兵は腰に紐をつけられ、肌着に素足で引き出された。顔には血の気がなくやつれ果て、警戒兵よって隊列の中を引かれた。腹の立った日本人仲間から烈しい罵声が飛んで、営倉代わりの地下霊安室に死んだ上官と一緒に収監される。

古い諺に「人の禍福はあざなえる縄の如し」と。部下に情をかけた者が落命し、逃げた本人は捕まつて命が保てるとは、何たる運命の悪戯であろうか。この後にも二回ほど脱走事件があつたが、もちろん後になつて帰国の望みが出てきてか、困いがなくても監視不十分でも逃げる患者はいなかった。

宮城遙拝と大隊長追放

所内の大清掃が命令された。

掃除が始まつて間もない九時頃。我が作業大隊長のK少佐から突然営庭集合の伝達があつた。全員整列したもののソ連側将校、警戒兵の姿が見えない。その時、中央前に進み出たK大隊長をみて驚いた。満州からこの地まで当番兵に運ばせた将校行李にしのばせて持参したであろうか、新しい将校礼服に金モール付の肩章が燦然と輝く礼装と頭には鳥の羽毛のついた礼帽姿で、胸には勲章もつけている。

これに軍刀を下げればまさに旧軍隊華やかな佐官の権力を象徴する姿にはかならない。

一同啞然とする姿を尻目に「諸君。本日は何の日であるか日本人であれば知らないはずはない。四月二十九日は恐れ多くも天皇陛下のご生誕の佳辰の日である。今たとえ捕虜の身であっても、祖国の再建と皇室のご安泰を、はるか異郷の地から祈念を捧げたい。よつてただ今より宮城（皇居）を遙拝する。「氣を付けー宮城に対し奉りかし

らあなかあ」

度肝を抜かれた兵隊達は慌ててこれに従い、一斉に東方に顔を向けた。旧軍隊でかつて四大節に連隊長以下将校が抜刀して「捧げ銃」を命令し、ラッパ「君が代」が吹奏された昔日の栄光をしのぶより、捕われの身に丸腰の礼装は、喜劇よりも滑稽でさえあつた。K少佐は満足して、早々に解散させたものである。

それから一時間ほど経って、今度はソ連側の点呼の命令が出され、再び営庭に集合した。ソ連側の収容所長、管理部将校、警戒兵の総出勤のものらしく厳しい雰囲気を感じられた。

所長は「明後日は長い歴史の中で、支配者階級との闘争の末、労働者が勝ちとった意義ある働きの祭典メーデーである。労働者の勝利を祝う誇り高い団結の日である。この日を間近にする今日、人民を長い間苦しめ搾取した天皇を遥拝するとは何たることか」長い説教が続いたあと、「本大隊の作業ノルマの極めて低い理由は、反動隊長のマイ

「動」を忘れることができない。抑留地によってその程度はいろいろで、人民裁判に明け暮れる狂乱怒涛の地もあれば、軍国色を拭い去る上に役立ったところもある。

幸いにも我がチェルノフスカヤは作業大隊と呼ばれ、モグラ掘りの粗末な田舎炭鉱で石炭生産に追いまくられ、他の収容所に比較して内部の反目や違和感がなかったことは、一つの救いともいえる。

熊本県軍人恩友会発行「満ソ殉難記」の第二章七節に「健闘の百七師団将兵は、最後までソ連軍に抵抗し、損害を与えたが故に、懲罰的待遇と管理で臨み、全ソ最高の死亡者を出した」と書かれている。

事実捕虜とは言いながら、決められた食料の確保をされたためではない。被服、衛生管理も最低、死亡者が多い中に治療や投薬とてなく、労働に対する給料と呼ぶ現金を手にした者はない。この中の救いは、ノルマに応じた食料であつても個人

オールKの作為的サボタージュによるものである。K少佐前に出よ：」

K少佐は一時間前の着古の将校服姿で肩を落として前に引き出された。「これよりK少佐の階級を剥奪する」と宣言するや、二人のソ連将校が進み出てK少佐の両側に近づき、手にした剃刀で襟の階級章を剥ぎ取った。

「今日ここでKの大隊長を解任する。また階級も一兵卒である。本日より西宮副官を大隊長に任命する」と再び一くさり説教の後、西宮大尉がいさつさせられた。

入ソ時に初めて知ったK少佐は兵卒上がりの初老の将校で、長い軍隊生活でこちこちに凝り固まった軍人で、念願の昇進を果たした昔の面影が忘れられなかったのであろうか。K少佐は夕方、ソ連のジープに乗って連れ去られ、その後の消息は知る由もない。

民主化運動と日本新聞

抑留生活の係わりの中で、いわゆる「民主化運

ごとの食事の差別をせずに、平等の配分であつたことであろう。

こんな情勢の中に民主化運動は、軍隊の階級制度の解体から始まり、政治部将校の出入れによる民主化活動の申し入れ、時折の演芸会の出し物の筋書きのチェック程度であつたが、ついにこの網にかかる大物はいなかった。

二十一年春よりハバロフスクで印刷の日本人俘虜向けの「日本新聞」が時折わずかな部数が届いて兵舎回覧とされた。活字に飢えた最中のこと、みんなで貪り読んだ、最後になると新聞はぼろぼろに傷み、読み取れないほどであつた。政治面では戦後のヨーロッパ情勢、ソビエト同盟の輝かしい勝利と民族解放を讃える。日本国内の混乱と飢餓状況が報道された。

ソ連の管理下で発行する新聞なので割引して読むことにしたが、世相をつかむだけでも役立つ。ナチスドイツやイタリアファシスト党の遺滅。独裁者ヒトラーが愛人とピストル自殺を遂げ、ムッ

ソリーニ大統領がファッショを憎む民衆によって一家惨殺された。

連合国側はドイツのニュールンベルクで、極東は東京で戦争犯罪人を裁く「戦争裁判」が開かれる。東京でこの裁判に出頭するはずの近衛文麿が自邸で服毒自殺したとあった。

敗戦とはいえ、貴族のトップに在る者として敵の縄目を受けることに耐えられなかったのかと推量した。かつて日中事変から太平洋戦争に追い込んだ時の宰相として、ソ連にとつて最も好ましからぬ人物であつてか、この人の振り仮名は「このよあやまろう」となっている。

我々の関心の帰国問題には、一貫して「日本側が故意にスムーズな帰国を妨げ、引揚船を送ってくれない」と日本政府の責任のように書かれていた。

いつからか連載小説も載るようになり、小林多喜二の「蟹工船」、徳永直の「太陽のない街」など、かつての左翼文学も連載された。

家郷に確かに届いたようだ。

凍土に友の墓穴を掘る

シベリアの真冬の寒さは、粗悪と生きる限界の食糧、粗末で少ない被服、劣悪な生活環境との相乗作用によって、二十年の越冬は峻烈を極めたと見えよう。発疹チフス、大腸炎、栄養失調など、多くの捕虜たちが家族の待つ内地帰還の夢も虚しく、次々に非命に倒れていった。

死が迫る最後の怨念とも言うべき悲痛なうわ言は、幾山河を隔てた我が子の名を呼び、妻の名を呼んでいる。妻子のない若い兵士や義勇隊員は一樣に「お母さん」「かあちゃん」万斛の恨みをのんで、最後は暗い地下兵舎の荒板の上で、汚れた毛布一枚に覆われ、小さな屍に果てるのであった。

死体の周りには、我も明日なき友のたたずむ姿はあつても、菓子や香花はおるか、末期の水さえやれない情けない最期である。

入ソ間もない十一月中頃から、各兵舎から毎日一人、二人の遺体が松の荒板の棺に納められ重ね

驚くべきは、ポーランドでナチスドイツの手によるアウシュビッツを始め、数カ所において四万人もの殺人工場が明るみに出て、国連から調査団が派遣された記事もあつた。

日本新聞の記事の最後に、責任者であろうか「高山秀雄」、ほかに浅原正基なる人物がいて、「諸戸文夫」(当時の外務大臣モロトフにあやかつたという)のペンネームで論陣を張っていた。

ここで日本新聞に快刀を振るい、シベリア天皇と恐れられた「諸戸文夫」こと浅原正基は仲間からかつての不利な履歴を暴かれ、後日失脚してソ連側より懲罰の刑を受けたと聞く。

思えば「人間万事塞翁が馬」ならざるはなしと
いうことか？

二十一年秋頃、ソビエト赤十字社の厚意によって国際俘虜通信が許され、故郷に手紙を出せるとの朗報があつた。通信連絡網のスロー振りを知っているだけに人氣がなく、私も断つたが、ソ連側の検閲が煩く、生きて、いることだけの手紙ながら、

である。ソ連側の命令で三日分ほどを一時に埋葬することが多く、室内は暖房のため死臭がただよい、堪えかね詫びる気持ちで室の外か霊安室に置くこともあつて、哀れにも遺体はこちこちに凍ることになる。

二月末頃、体が弱つてオカとなったとき、死体埋葬の使役に出される。墓地は二キロほど先のカラ地区共同墓地である。

その日は二体を大八車に積んで、栄養失調者四人で幸い警戒兵はつかなかった。

厳寒の中こち凍てついた山道を引いたが、途中急傾斜地が二、三カ所あつて、体力のない連中は大きい大八車を持って余し、悪戦苦闘で上り坂を登り、下り坂もさらに大変であつた。四人で静かに下り始めたとき、一人が滑って転倒した。もうどうにもならない。危ないのでみんな手を放す。大八車はガラガラ音を立て、道の脇の白樺にドスン…その途端、二つの棺がつるつるの雪の上を流れ、大きい石に触れたと見るや、棺の底が抜けて

凍った一体が薄毛布の中に包まれたままサーツと坂を滑り落ちて行く。凍った遺体は、まさに石の地蔵様の姿に見える。皆青くなって棺に納め直し、ようやくカダラ墓地に着いた。

墓地はカダラ村一帯の各収容所で利用する共同の日本人墓地に利用されたもので、木陰になる一本の樹木もない雪嵐の吹きすさぶ荒野の中で、死体は不規則に埋葬され、百近い土饅頭が雪をかぶり、墓標は許されないということで、焚火の炭で「故何某の墓」と印された板切れが雪の中に建っているだけの殺風景さには遣り切れない思いであった。

墓地にはツルハシとスコップがあつたが、凍土は厚く、まるでコンクリートを掘るに等しく困っている、先着の警戒兵が石炭をリヤカー一杯届けてくれた。これを棺の長さに盛って火を焚いて表土を融かして掘れということであつた。

警戒兵がまた遊びに出かけたので、遺骨収集を思いつき、棺の蓋を外して胸の上に手指を組み合

わせている遺体の両手首を斧で切り落とす。斧をかざすと痩せ細った手首が、コンコンと枯木を切るような音をたて、凍った肉片が飛び散り、やがて組み合わせられた両手がぼろりと体から離れ落ちる。くすぶる石炭の火中にねじ込む。

凍土が融ける間、昼飯の凍ったパン一切れを火にあぶって食べる。周囲の墓の中には埋葬が充分でなく、覆土が浅く毛布の端が出ているもの、雪だけ深く掻き上げて誤魔化しているものも目についた。

地表が大分軟らかくなったところで、手首の骨を拾い、一気に土を掘り上げ二体を埋葬する。板の切れ端に氏名と死亡日を記して手を合わせ、訣別を告げる。

雪解けの春なかば、埋葬に出た戦友から様子を聞くと、土の浅い墓は遺体のはみ出し腐臭が漂い、墓標がわりの記名板は何者かに焚火の材料とされ、悲しいことに現地民であるうか、死体をくるんだ毛布や肌着がはぎ取られ裸の遺体があり、金冠の

火炎夜空に凍土掘る

岩手県 吉田 欽三郎

一、終戦

敗戦と混乱

昭和二十(一九四五)年三月、北満榆樹屯(現中国東北部)の航空部隊におつた私は、作戦命令により移動修理班の一員として南満に転出した。

本土決戦に備え、南満航空隊にある老朽した自動車動く車とすることだった。

最初の任地、錦州飛行場部隊には二カ月ぐらいいもおつたらうか、一般用トラックはもちろん、ガソリン補給車・プロペラ始動車等、軍務のことなれば一生懸命やった。

修理班は少尉を隊長とし、自分以上の上級者は隊長と古参兵長の二人だけで、新米兵長の自分を挟んで一等兵二人、二等兵四人と軍属二人の計十一人ぐらいたつたらう。

入れ歯は石で叩いて外し取つたとみられる跡があつたという。ソ連の物資不足の深刻さと、彼等の国民性を垣間見た思いで、大きい衝撃を受ける。

戦後、チタ地区独立墓地と呼ばれたここカダラ墓地は、昭和三十六年八月、厚生省が主催する日本人墓参団が派遣され、初めて遺族代表の手によつて香花が供えられ、懐かしい酒やタバコを味わえたこと、せめての慰霊となった。

当時の新聞の見出しには「果てしなき荒野にただ涙」と書かれ、改めてこの地に果てた同胞の悲惨さがしのばれた。この墓に眠る我らの戦友の一人一人を思い起こすと、まだ少年のあどけなさの残っていた顔が浮かんでくる。報道では墓地は整然と並び、管理が行き届いていたとあつて、救われる思いであつた。